

西洋旅案内

上

福澤諭吉著

西洋旅案内

附録萬國商法

慶應三年

丁卯初冬

尚古堂發兌

西洋編纂序

西洋旅案内序

論語に朋遠方より来るとも道理は悦ばしむべ
 くと國の遠方より来るとも隨分悦ばしむべ
 くと之れも唯人の来るとなるがう待げの事
 ても新し折常ハ此の事をも遠方一出張た多
 くの余の性質物に好む事には其機を
 得て萬延申乃事はが先をカリホルニヤに
 航海一に漢文久安此年ハ歐羅巴北諸國
 巡歴一今茲ハ又ワシントンニエーヨルク一行

西洋旅案内序

都令ニ度外國に旅行するに少くも一
事或見ゆ一其國に人情風俗を知る
に少くも一日本國の道來を道く
一之那里殊一去來に及ば外玉子
好之屋一との官許に在る同好
海のお脚船の出來に及ば双方に
づき兆えし其の後に人の外一注
言の必多るべし中興のめれに
其の筆は引

乃幸免の稀船に撞接乗船の時
その度見聞す一だけ旅書集又先
羅巴一行き一と書留置一日記
此中より小抜華一の意に取集
段里是故西洋旅案内に題する
る外國の事一或更し一編する
るものより其意味涉りけり
書讀之又その國一渡り
明の幾人の一其意を

船之乗蓋は此の如く即ち里余の本意
とてしるべきなり世間下りては情儀の多
く是れを以て舟中なるは人々を
こゝろに於て行ふべし

芝應三年丁卯の旨

福澤諭吉 誌

西洋旅案内目録

卷之上

世界の圖

總論

船賃拂方の事

為替金の事

通用金相場の事

船中の模様

經緯度の事

世界中時候の事

印度海飛脚船の立寄る場所

上海

香港

サイゴン

シンガポウル

ビナン

セイロン

アデン

スエス

アレキサンデリヤ

メシナ

マルセイユ

パリ

マルタ

ジブラルタル

サウスアンプトン

ロンドン

卷之下

太平海飛脚船の立寄る場所

サントドニ

サンフランシスコ

アカホルク

パナマ

アスピニウヲナル

ニウヨルク

附録

商法

コンシユル勤方の事

兩替屋の事

高賣船雇入の事

積荷請取状の事

高賣船質入の事

荷物送状の事

賣捌勘定書の事

災難請合の事

生涯請合

火災請合

海上請合

目録終

請合を撰る事

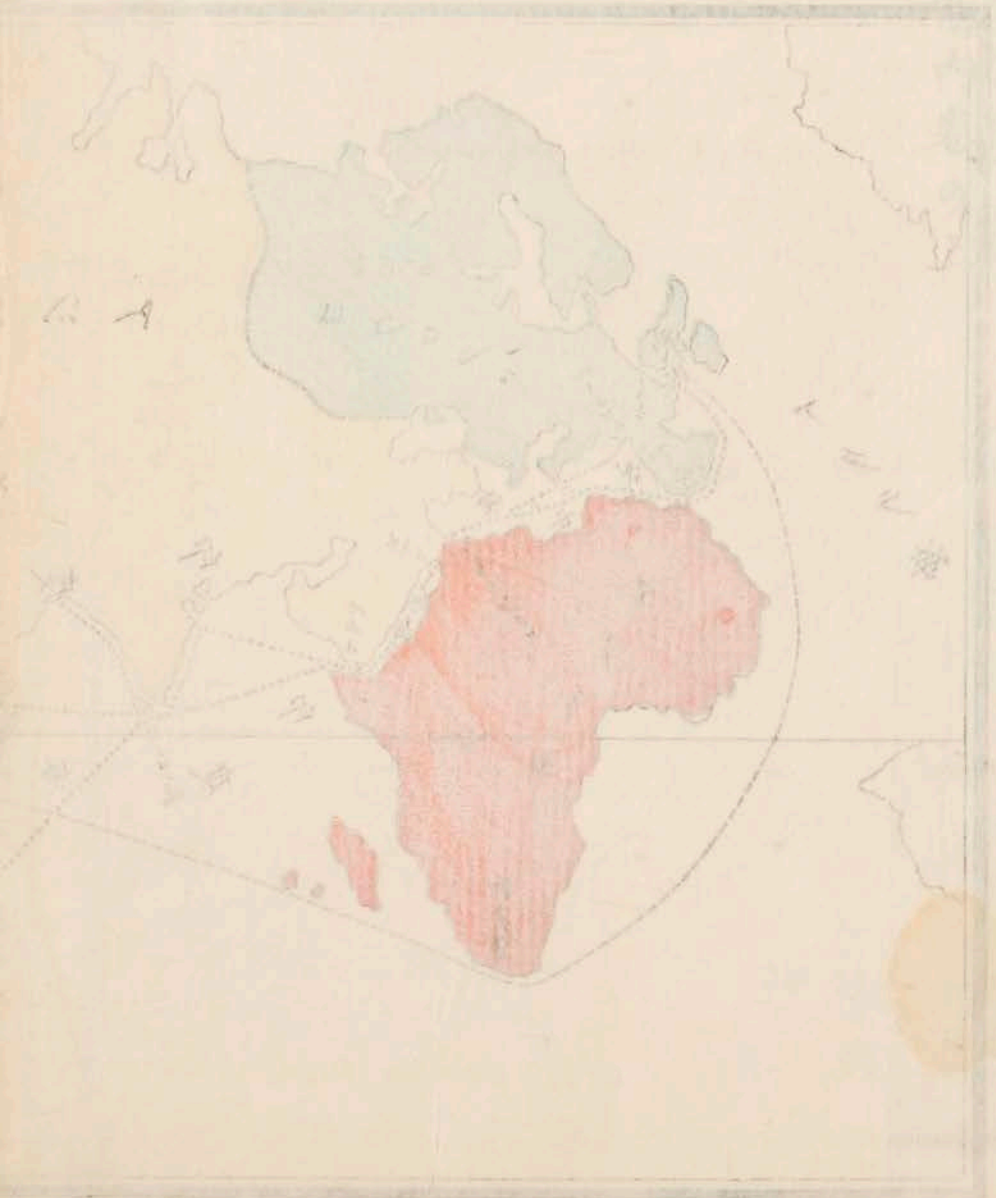
の事の上の輪圖

と撰る事

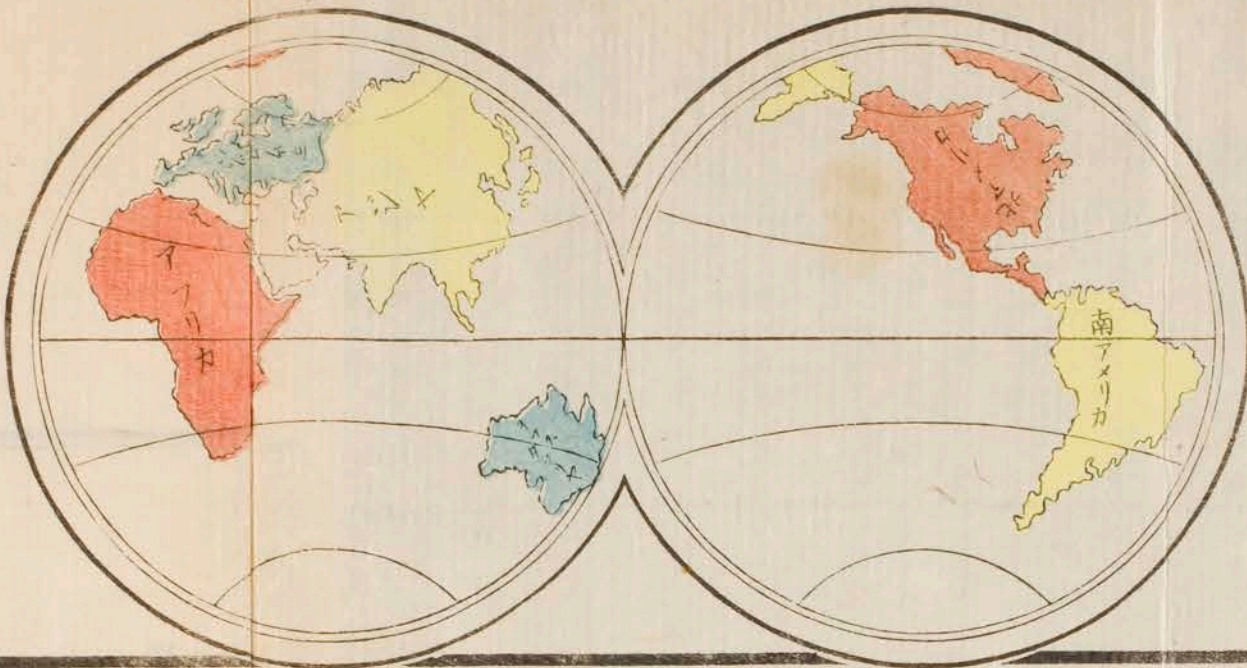
世界中の輪圖

と撰る事

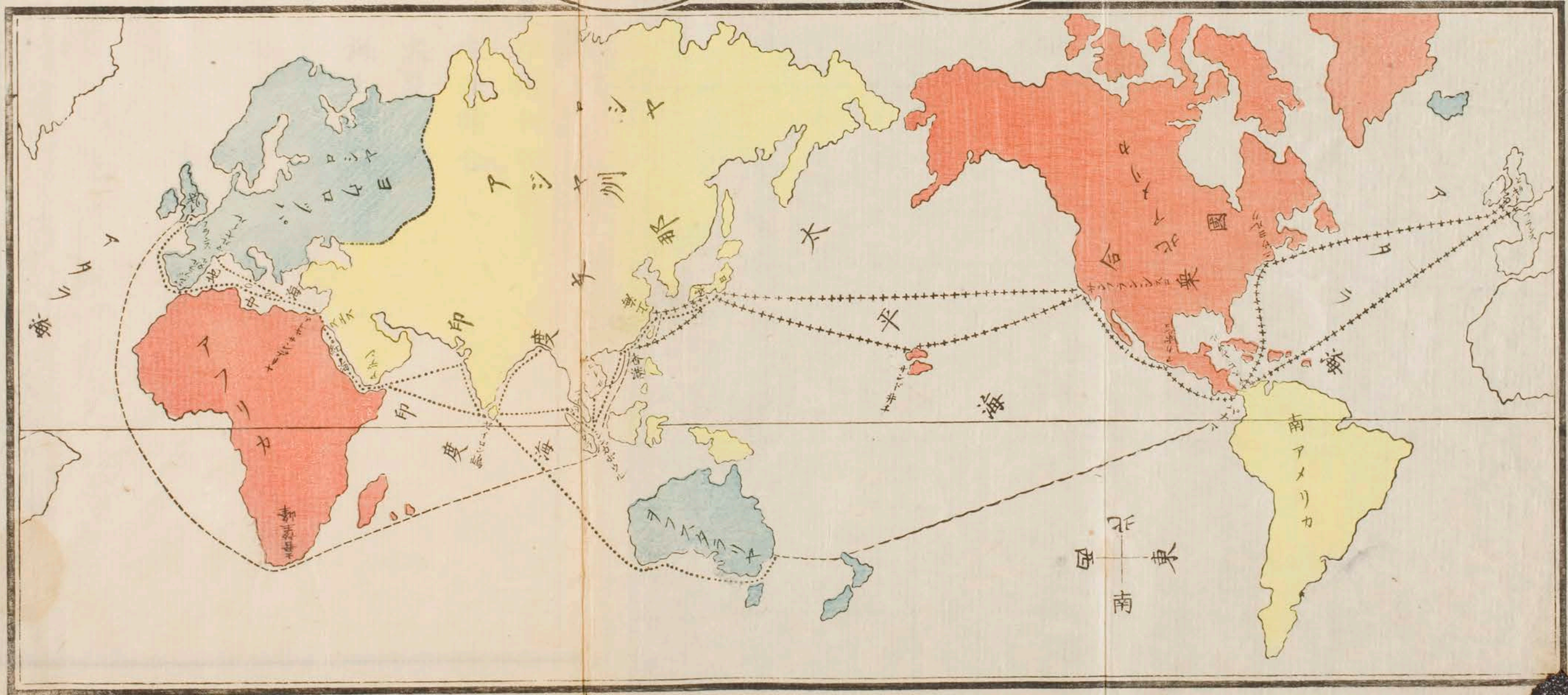
の事の上の輪圖



上段のまろき繪圖二
 つの内右の方と西半
 球といひ左の方と東
 半球といふ世界のま
 ろき所と示したるも
 のなり

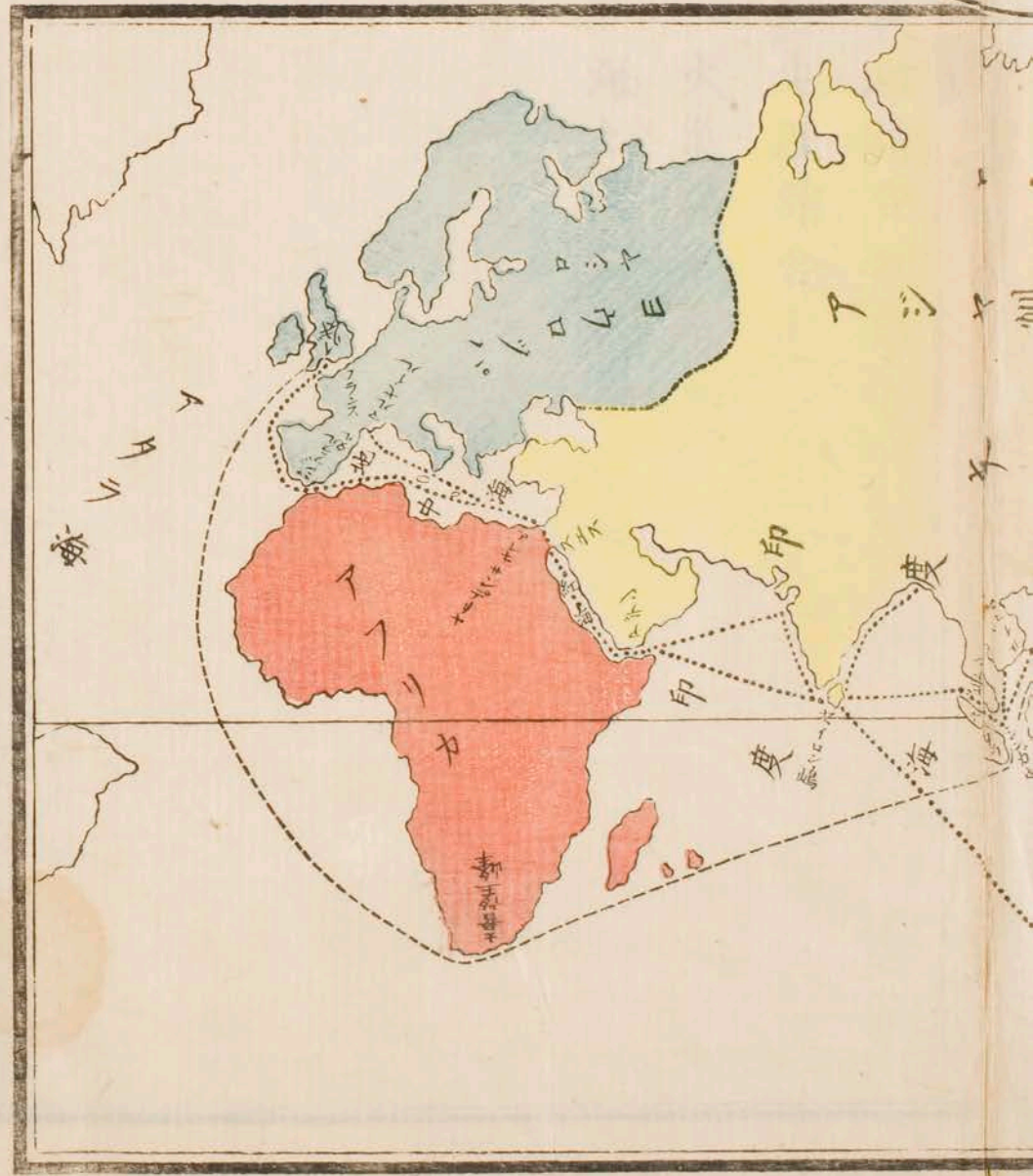


下段の繪圖はまろき
 地球と平ふひろげて
 世界中小船の往來を
 路筋と顯しきふも
 のなり上段の繪圖と
 引合せ見るなり





下段の繪圖はまるき
地球と平ふひろげて
世界中小船の往來を
る路筋と顯しきふも
の如く上段の繪圖と
引合せ見らるる



西洋旅案内卷の上

福澤諭吉 著

世界の形ちは圓くして球の如く故小めきと地球
といふこの地球の中は海あり陸地あり陸地を五
小分て五大州と名く第一亞細亞洲第二歐羅巴州
第三亞米利加州第四亞非利加州第五奧太利州六
まなり亞細亞洲の中は日本支那印度等の諸國
ありて金銀銅鉄材木絹糸綿茶砂糖其外天然の産
物多し亞非利加州奧太利も其國の産物は多きまど
も國人の生れつき愚ましくて學問の道開けを道具

仕掛の目論見も出来ど一口ふいはつまらぬ國柄あり世界第一學問の世話行届き人情おとなしく兵カ強く禮儀正しくて國富み天然の産物ハ少々多きとも人の工夫て物と造り陸小を蒸氣車と用ひ海小を蒸氣船に乗り何事も便利と盡文武ともふ盛れるを歐羅巴と亞米利加と限る殊に歐羅巴の中にて英吉利佛蘭西日耳曼荷蘭を始に亞米利加ふては合衆國の中等にていと大國なるゆへたゞ亞米利加等のも出交易と屬し既に支那日本とも條約を取結び且又印

度邊の島々を歐羅巴諸國の領分あり數千の商船東西に往来し商賣日小繁昌するハ元來亞細亞洲に産物多きゆへふて即亞細亞洲は世界第一の交易場といふを日本も外國人の出とを西洋人とといふを歐羅巴亞米利加の人々商賣の荷物と持渡さる西の方より來ふゆへを然る所右の通西洋人々東方の亞細亞洲と交易すふ小荷物は大抵帆前船にて喜望峯を積廻ることをなせども急用の品物を送る又商人ふと遠き海路に往來するは小荷物船に乗てハ不都合なる小付を先年より

英吉利佛蘭西の商人仲間と結び印度海定飛脚の蒸氣船數艘と作て其便利を達し支那日本と歐羅巴へは海上風雨小相らぬ凡六十日よて着し夫より亞米利加へ十日余よて渡るべし尤飛脚船ハ數艘用意して途中度々乗替るべし先日本と出帆し其乗筋并ニ船と乗替る場所左の如し

横濱より

上海

五百五十里

上海より

香港

四百五十里

香港より

シンガポウル

七百五十里

シンガポウルより

セイロン

七百五十里

セイロンより

アデン

千里

アデンより

スエス

六百里

スエスより

上陸

百里

を越し其の地續と蒸氣車

ニ乗て一日

を越

し地中海

に出る所の港をアレ

キサンデリヤといふ所より又船を乗り地中海

を渡り佛蘭西のマルセイユに着し又

ジブラルタルの瀬戸を出て英吉利のサウスア

ンプトンへ着し又亞米利加へ行くものは英吉

利のレイウルポウルといふ港より又ハ佛蘭西の

ハウルといふ所より毎日出帆の飛脚船あるこ

となく十日余の船路して亞米利加のニウヨ
ルクとわいへる所へ着るべし尚くわしきことは
繪圖を見よ

世の開け月ニ進み日ニ新しうして諸國の産物次第
ニ増し交易の道益繁昌する中ふも亞米利加の合
衆國は世ニ名高き大國よて商賣の繁昌するは英
吉利佛蘭西などの諸國よても遙く勝るほどの
となふがこのたび其國此商人等仲間と結び太平
海の定飛脚とて大なる蒸氣船數艘と打建其内一
艘ハ去年の冬既ニ成就して日本へも渡来し即余

輩のみのたび乗て亞米利加へ行きてコロラドと
云る大船なすの數五艘アロラアイトレボ船
り名と附けたる五艘と何れも三千ト余の大
り船ふ一体亞米利加の太平洋の飛脚船と目論見
し趣意ハこゝまで西洋の人々亞細亞州へ行て交
易する小西の方より出て印度海と渡りたれども
元來世界の形ちを圓きものなきば西より行くも
東より行くも行つて先を同くめとなふゆへ此
度ハ東の方と廻て亞細亞の諸國へ往來するの便
利と設々たるありぬの飛脚船より西洋諸國へ往

来る船路并ニ船と乗替る場所左の如し

香港又ハ上海より横濱 里數ハ前ニ

横濱より横濱 二千五百里

サンフランシスコよりバナマ 千五百里

バナマよりニウヨルク 千里

バナマは北亞米利加と南亞米利加との界にて

のの所へ上陸し二十里の地續と二時斗

ふて通越し亞米利加の東側なるアスピニウヲ

ルといへる所へ出て夫より又飛脚船ニ乗り亞

米利加合衆國の大都會あるニウヨルクへ着る

ニウヨルクより歐羅巴諸國へ行くは矢張英

吉利佛蘭西より亞米利加へ渡るも同くあると

て日く出帆の飛脚船に乗る十日斗まで英吉利

のレイウルポヲルり又ハ佛蘭西のハナルへ着

るべし

右の通りぬるたび太平洋海の飛脚船出来たる小舟

てハ西洋諸國より亞細亞州へ往來する小船路の

日數ハ印度海の飛脚船と同一のとて且印度海

は夏冬の差別なく暑氣甚しくして船中難渋なる

ゆ一此後西洋のく荷物ハ印度海より積廻ると

も旅客だけは多分太平洋海の船にて渡来をべしき
 去迄がられずで外國人を見て西洋人と唱へたま
 ども今は東の方より来るゆへ東洋人といふとも
 理なき小ありが實小昔日とハことろわすたる世
 の有様なり
 日本より外國へ渡る小ハ印度海の飛脚船ニ乗る
 も太平洋海の飛脚船ニ乗るも其手續ハ同トありと
 て心得るべき箇条左の如し
 船賃拂方の事
 船賃ハ先方着すまでの惣入用と前金小拂ふ取極な

里横濱住居の外國人小飛脚船の引請ありてあり
 者ニ金と拂て便船の切手とチケットと請取り此切手
 を本船ニ持参して船賃拂濟の證據とせるなり
 賃の直段は凡左の如し
 横濱より印度海の飛脚船ニ乗て佛蘭西のマル
 セイルより又ハ英吉利のサウスアンプトンまで
 行く小
 一番の客 七百二十ドル余
 二番の客 五百ドル余
 横濱より太平洋海の飛脚船ニ乗て亞米利加のニ

ウヨルクオで行く

一番の客

四百三十ドル余

二番の客

三百十ドル余

横濱より亞米利加までの船賃は英吉利佛蘭西

までの船賃よりも余程下直なまとも亞米利加

の飛脚船ハ賄も粗末よて且酒の代は別の勘定

ぬるゆへ兩方とも同割合なるべし

亞米利加と英吉利佛蘭西との間此船賃ハ凡左

の如し

一番の客

百三十ドル余

二番の客

七十五ドル余

一番二番の外小スチャレシ又々デッキパッセンゼル

とて極下等此客ありぬ船賃ハ甚下直凡百五十

ドルラ半の入用おて歐羅巴まで行かる一十

ンフランシスコへの船賃ぬは五六十ドルラ

不まされども船中賄の粗末なすはいふまでもな

く寢床もあふうな一むと甚難渋ふり

船中持越しの荷物印度海此飛脚船ハ一人前目方

三十六貫目限太平洋の飛脚船ハ同三十貫目限と

定とをぬの定よて目方張るときは凡一貫目小付

一ドル半斗の運賃と別段ニ拂ふことなり但
着替の風呂鋪包などと携て船ニ乗るとも其目方
と改るべし若又莫太の荷物ありてこまを積
荷小して船底ニ積込先方へ達する小其運賃右
の割合より下直なり

為替金の事

横濱長崎箱館邊ニ専ら通用を為洋銀ハメキシコ
ドルラルやて亜米利加合衆國の鄰國なるメキシ
コの通用金也其相場を時々違ふこと大抵日
本よりは一ドルラル小付三步位の通用なり日本

の通用金は外國にていまだ見れぬもの少く不
通用なるゆへ彼國へ行くときはそのメキシコド
ルラルと持越ことぬまども大金ありては船
積卸の取扱も不都合なり又こまを飛脚船へ預切
りして先方着の上請取る仕法もあるまども百ドル
小付一ドルラル餘も預賃を取らふ右の次第ニ付
外國へ金子と持越すふは其金と為替を為し其
法色々ありまども此節専ら行きて大大夫なる
は英吉利の為替問屋といふクの手形を買ふめとな
る英吉利の都ロンドン小万代不易ともいふべき

商人組合の爲替問屋幾軒もありて世界中此諸國
 へ出張の店と設け既小横濱長崎も店と出して
 爲替商賣と爲りぬの店ニ行て何程も金と
 入る迄令其高ニ應卜時の相場を以て英吉利の通
 用ポイントよりへる金の手形と渡すぬの手形と以
 てロンドンの本店へ行けを正金と引替るる勿論
 如きども本店斗上限りぬづれの國へ持越ても
 右ロンドンの爲替問屋と取引をする両替屋へ渡
 せば直小正金と引替又ハ素人同士の賣買もな
 る申へたとへば世界中通用の銀札なり其手形の

文言譬へば左の如し

光

一幾ポイント幾シリング幾ペンズ也

右者何年何月何日何處を何素より請取を
 高正付此等て手形と爲生え上幾日と浮同各
 本書之高可被在渡但一二年之て手取合子
 渡申問者も仍如件

場所附

爲替問屋仲間姓名書判

ロンドンのユニオンバンク

西洋衣案内

右の文言小第一の手形と金子と引替ふして第二
第三の手形へは金子と渡間敷云くとあるは初め
手形を買ふとき同ト手形三枚渡して一二三の印
とつけ即一印ニ金を渡せど二三印ハ渡さど二
印ハ渡さば一と三印に渡さどや記さり申へ小遠
方へぬの手形と持越さると三枚の中一枚を留主
宅へ残し置次の飛脚船へて送るよふし一枚ハ
自分ハ懐中一枚を連の者へ預け置あどのめと
ニそまがたとひ途中より紙入を海へ落し又は萬
一難船れどして手形とふくせしときも留主宅へ

残し置きし手形を取寄て金と請取べき越向なり
但し金子と請取るときは當人の書判と手形の裏小
記し且手形の數三枚揃とさまを然るべき請人と
頼むれど彼是と渡方手重なるゆへはさくは三
枚とも間違ふまふ自分へて持泰さる方宜し
又手形の文言ニ手形と差出せし上幾日の後金子
可相渡とあるは前より通リロンドン
の爲替問屋の手形ふれを世界通用の銀札ふり何
方までも差支なく正金ニ引替る如きどもめれハ
相對のことふていよく本筋ニ行し正金と引替る

所ハロンドン^{ロンドン}の爲替問屋^{為替問屋}を不^不由^由へおけ手形^{手形}追^追く
 人の手^手を經^經て遂^遂ニ右問屋^{右問屋}不^不至^至り金^金と請取^{請取}るとき
 手形^{手形}と出^出して正金^{正金}と請取^{請取}るまでの間^間或^或者^者三日^{三日}或^或
 ハ十日^{十日}二月^{二月}三月^{三月}半年^{半年}まで夫^夫々の日限^{日限}あり也^也
 小^小初^初め手形^{手形}と買^買ふときたとへて三日^{三日}限^限の手形^{手形}な
 ば其相場^{其相場}うろく三月^{三月}限^限の手形^{手形}ぬれを相場^{相場}やを
 即^即手形^{手形}の文言^{文言}小^小何^何日^日の後^後とはおの日限^{日限}といふを
 買^買ふときや或^或は手形^{手形}は相對^{相對}に賣^賣ると
 買^買ふときや或^或は一日^{一日}限^限の長短^{長短}にて損德^{損德}はぬよもの
 羅^羅ンドの本店^{本店}にて直^直ニ金^金と出^出すやとせらる
 即^即手形^{手形}の文言^{文言}小^小何^何日^日の後^後とはおの日限^{日限}といふを
 買^買ふときや或^或は手形^{手形}は相對^{相對}に賣^賣ると
 買^買ふときや或^或は一日^{一日}限^限の長短^{長短}にて損德^{損德}はぬよもの

右^右の外^外爲替^{爲替}の仕法^{仕法}ハ種^種々^々ありまども其^其説話^{説話}長々^{長々}ま
 ばおの小冊子^{小冊子}に記^記し難^難し
 通用金相場^{通用金相場}の事^事

通用金相場^{通用金相場}の事^事

一 英吉利^{英吉利}の通用^{通用}ポントとりへる金^金錢^錢を二十^{二十}分^分
 する銀^銀錢^錢とシルリングといふ一^一シルリ^リングと
 十二^{十二}ふ分^分たる銅^銅錢^錢とペンストといふ一^一文^文つう^うを
 とする彼國^{彼國}の言葉^{言葉} 即^即一^一ポントは二百^{二百}四^四十^十ペン
 となす
 一 メキシコ^{メキシコ}ドル^{ドル}ラルと以^以てポントの手形^{手形}と買^買ふ

ふと固より時の相場次第はまぎれも大抵一ドル
 ラルは付五十二三ペンス即ち一ポントハ九四
 ドルラル半に當るドルラルの相場と三步とを
 送バ一ポントは日本の通用金三兩壹歩二朱斗
 一 亜米利加のドルラルはメキシコドルラルより
 も少一輕一 大抵百ドルラルに付六七ドルラル
 の差あり
 一 佛蘭西の通用金はフランクといふ銀錢にて大
 抵五フランク半と一ドルラルと釣合ふ相場あり

りぬのフランク二十枚に當る金錢あり十年斗
 以前の新吹ふて金錢の表に今の佛蘭西帝ナポ
 レオンの面の像ありゆへに歐羅巴にまはぬの
 金錢は異名を附てナポレオンといへり即ち一
 ナポレオンは日本の二兩三步斗に當る
 西洋諸國にてはあまにメキシコドルラルと通用
 さざまぎれも印度海の港并に上海香港邊を専らぬ
 のドルラルの取扱ふゆへ日本より外國へ渡る
 とる船中の小遣錢ハメキシコドルラルと正金ふ
 いて持参をべし

船中の模様

西洋の船の大小といふはトンの数を以て計す
 日本にて船の大きさを積高の石數にて勘定す
 と同様なりトンとを掛目の名より一トンは米六
 石餘の重さ相當す由一トンの船といへば六
 千石餘積む船なり飛脚船を大抵二千トンより四
 五千トンまでの大船にて荷物も澤山積む旅客も
 多人数乗る船中の模様ハ太平洋海の飛脚船も
 印度海の飛脚船も大抵同一のやをなす此度余輩
 の乗りし太平洋海に飛脚船コロラドの模様とあら

まゝ左記をべし船の大きさは三千七百トン長さ六
 十間中八間蒸氣の力も甚強と逆風あて一昼夜ニ
 百二三十里も走る船の兩側ニライフボウトとて
 仕掛ありたると水船ふふとも沈むおや
 ともふふたつたのふるゆへ本船の難船をふ
 むとあるときはこのライフボウトにて小舟
 エ夫なり其きりライフボウトの内より平生より
 飲水パン并ふ天文と測る道具を備置き何時あて
 も不意の節をぬきふ乗移り饑渴の心配もぬく道

具ふて天文と測さど何方ふとも自由に行ふ事
よふふしたるものなり又船中人数銘くの寢床
に浮袋の用意あり亦非常のたれふ備へしも
のなま○乗組の人数船將以下役く水夫頭頭小使
に至すまで百人餘ふて船中一切のめとと取扱ひ
旅客ハ千人斗も乗とく席と上中下三段に分け上
の客を船の艙小部屋あり一部屋の廣さ凡四疊半
其片側へ中二尺長さ六尺斗の寢床の棚と三段ニ
片まで三人相部屋なり但し船中造作の模様小由
て二人寢の部屋もあり六人寢の部屋もあり又客

の多さゆきを三人寢の部屋一別小寢床と附て五
人寢とそふのともあり○部屋ハの寢床一夜具の
用意ハ勿論朝夕のつらひ水手鉢うがい茶碗さ
ぼん手拭水こぼし。若びん。船小酔ひしとき吐く器
ほども備り部屋并ふ其外ハ掃除を小使の引請よ
て船中塵とつむれよふにゆく行届るり毎朝
掃除終はば四半時おあふ船の役人并ニ醫師の立
合ふて船中の見廻あり○食事を朝食夕三度朝の
食事とブレッキフアスといひ昼とロニチンといひ
夕にチン子ルやいふ朝ハ茶とのニ食事の品も十

色斗登も同一く一寸葡萄酒れやのこ格別の馳走
 ふ一夕の食事そ三度の内一番の馳走ふて色くの
 品三四十種も取揃へ酒も澤山用ひゆるると飲食
 を馳走の品ハ三度とも肉類魚類飯パン食後ふ
 蒸菓子水菓子總て料理ハ日本よりも餘程丁寧な
 且但日本よて平生肉食小馴さざる人を船に乗
 るとき漬物醬油其外の食物少半用意をべ外
 國風の食物のこふてはそぐめ二三十日の間困
 々のなり○食事の間は中三尺斗の長臺幾個
 もありて其上馳走の品物并銘くの皿茶碗と

ならべのの臺とテーブルといふ食事とを必者ハ
 十人も二十人も椅子ふ腰と掛けてひとつテーブル
 の周圍寄集り寄合膳よて食事する姿あり○上
 の客病氣の節自分の部屋へ食物を取寄すは勿論
 又自由茶をゆいひ付るとも勝手次第好ま
 部屋の内ふ煙草ハ禁制なり都船中ハ火の元
 嚴重よて火消の道具も十分用意し時々不意
 鐘を鳴して火事の調練をなさることあり○中の客
 ハ艦の下の段は部屋あり部屋向も鹿末食事も上
 の客と一處ふするぬとれらる其外の取扱上の客

とる差別あるは格別見苦しきものなり ○下
の客ハ船の舳の方へて水夫如ど、
あふらな一食物の粗末ふるは勿論は
自由なるは位ふて極下輩の者なら
其難
洪下堪はる庵 ○船ハもとより乗
合めめとな
と世界中諸國の旅客打交り親
子連もあ
り夫婦連
もあ
り老人も
あり子供も
あり或ハ酒を
飲で謡と
歌ハ或ハ茶と
飲て理屈とい
ひ或ハ書と
讀ミ或ハ
牌子と
或ハ田舎者
が在處の自
謾と
或ハ下
手將基が
まけて腹と
立笑ふ者
あり泣く
も此何

愚弄さる者あり嫌はる者あり其有様ハ日本
の乗合船ニ少くも替るめとな
但西洋よてハ
婦人と丁寧取扱ひ都て行儀正しき風俗
ゆるゆ
一初て船に乗る人などよく其めと心得婦人
一向て失禮とせはるる勿論男子同士よてもあ
る慢すまき話とよべらるる人の見
る處よては
一とだとなぬる赤足を出し婦人の前よて
烟草をの
む如どハ甚だ失禮のめとせり謹むべし
このめ
とる船中斗ニ限らる彼國一
体此風俗なるゆへ上
陸の後も忘るべらるる ○船中の
便所ハ左右ニ十

西洋旅行案内
所づゝもありて上の客と中の客とは區別あり又
船の方へも下の客并水夫ども此便所數ヶ所あり
都て便所を船中役人の立合ふて毎朝掃除し誠
小奇麗なり彼國の大便所を家の内小あるものを
船中へあるものも其模様少しも替らざ一段高き
所へ圓き穴ありて此穴小腰を据る趣工なり然
る小初て外國へ行くと其めとを心得て
日本流にそると便所を汚しうならず外國人を笑
とまで面目次第もふき出とありよふつこく心
庵

經緯度の事

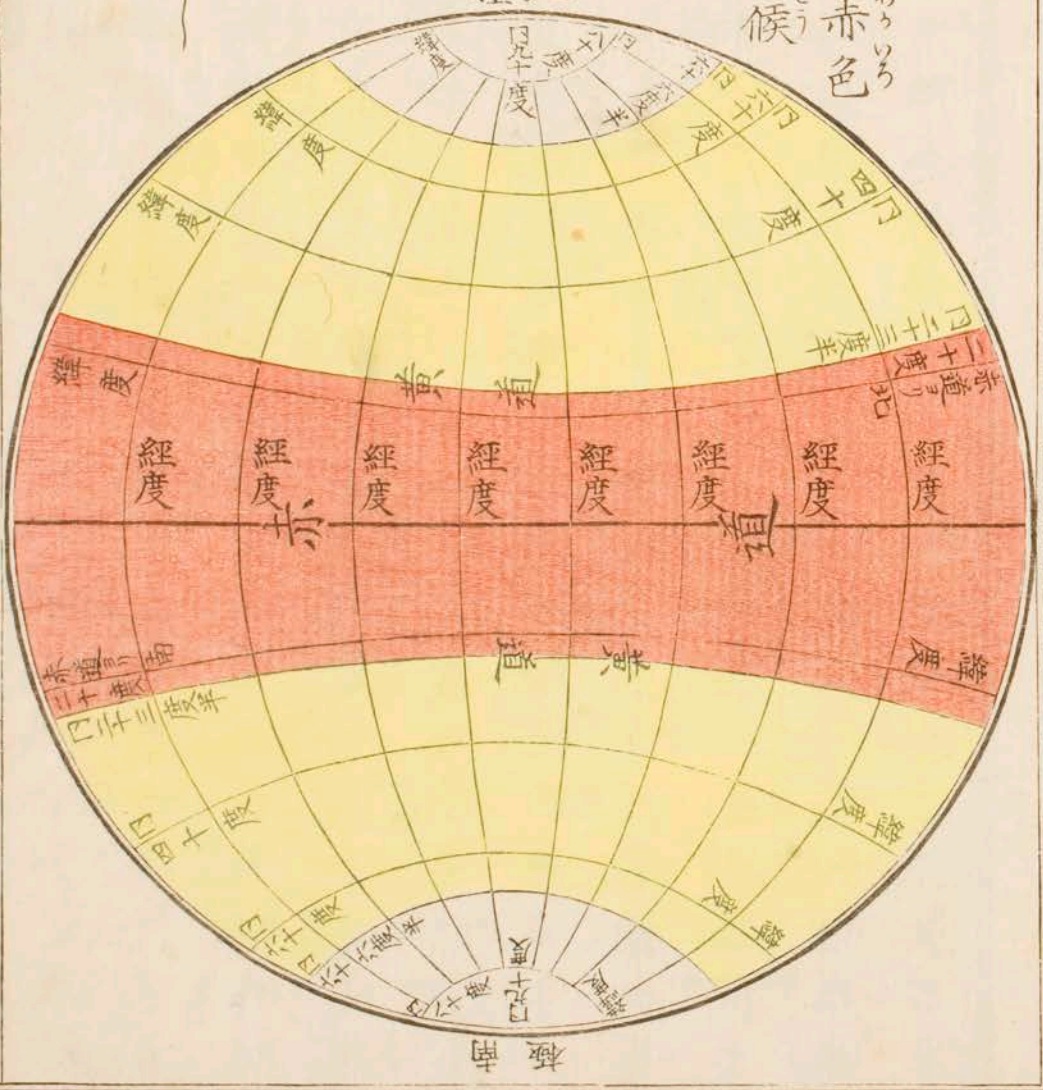
陸地小人の住居する處を此處より彼處まで
幾町此山より彼山まで幾里と定りたるものとあ
やも廣き大洋までハ渡海中十日も二十日も山も
見を陸も見を目當とすべきもの如ふや西洋の
航海者天文を測て方角を定めいらふ大洋の
ても少しも間違ふ其方角を定る仕方を地球の
北の端と北極といふ南の端を南極といふ北極と
南極との間はんをか此所小西より東へ一筋を引
てこれを赤道といふ赤道とまんなるやこまよ

北極小至るまでと南極に至るまでと兩方とも
 九十づつを合せて赤道の通り西東の筋を引き兩方
 合て百八十とぬるぬと南北の緯度といふ初前
 小といひ通り世界の形ちを圓きものゆへ右の
 如く西より東へ真直筋を引けば其筋ハ圓き地
 球を取廻すたる輪の形ちをなして地球の表側
 小て北極より南極まで百八十度あるを裏側も
 同トく百八十度あり兩面合て三百六十度なり一
 度を英吉利の六十里ふるゆへ世界の周圍ハ六十
 里と三百六十合せざる數ふて二万六千六百
 里なり

又英吉利のグリインウ井ツチといふ所の天文
 臺と本と北極より南極まで真直筋を引きぬ
 の筋より西と東一段々小六十里づゝ隔て、同一
 よふ小北極より南極一筋を引き地球の周圍を三
 百六十一に分けぬと東西の經度といふ右の如く
 世界の周圍を東西南北十文字に分け一度を六十
 里と定め渡海するとき天文と見て方角と測る地
 方の見へぬ大洋小ても船の居處ハ寸分も違ふ
 中をこれに航海者の測量といふ左とへは大洋
 小て船の居處北緯三十四度東經百三十七度とい

一、赤道より北の方三十四度即ち二千四十里英吉利の天文臺より東の方百三十七度即ち八千二百二十里の處に船の居るといふめとふて日本は遠州洋小當口但一英吉利の一里を日本の十六町五十七間小當り其百里ハ日本の四十七里余なり飛脚船も渡海中ハ毎日測量して經度緯度の數と一昼夜走るとる里數と紙に記して船中ニ張出ると一其度數を見と世界の圖ニ引合を違を素人ふても船の乗筋を方る處に左の繪圖ハ經緯度の大小と記をその如り

繪圖の中赤色の所の時候
あつた黄
色の所ハ
時候は
北極
南北兩端
の白き所
ハ時候寒



世界中時候の事

都て時候ハ土地の模様ニ由て色々小差あれども
 一躰ニ世界中の時候のふとといへる其大略左の
 如く赤道と真中と此より北の方へ二十三度半
 南の方へ二十三度半合て四十七度の間と熱氣の
 方角といひ時候甚だ熱く此邊の地方ハ草木よ
 く生長し大木銘木珍しく禽獸多し紫檀黒檀如ど
 いへる材木并ニ獅子虎象の類も盡くこの暖地よ
 出来るものあり其外菓實も椰子芭蕉の實麥米
 もよく登るゆへ先年より外國の人象虎など

持来て見世物小したるふともあれども西洋の本
 國より持来きゆるる所らに印度又ハ中亞米利加
 邊の暖地にて買しものな多し且又近來ハ南京米と
 て多く米と持渡さども此亦うふらに南京の米を
 かりにあらざる暹羅安南其外の熱國より出来ると
 外國人の買取て日本へ輸入するもの多し初右の
 如く赤道より南北二十三度半づく此所より界を立
 て其界と黄道といふ又此黄道より南と北の方へ
 兩方とも四十三度づきの間と平和の方角をいひ
 此邊を春夏秋冬の差別ありて禽獸草木五穀菓實

も程よく出来人の住居する所なり日本支
那西洋諸國ハ皆此方角ありふゆ一時候ハ大抵同
しめやなま但一魯西亞れどの冬分寒氣強きは此
平和の方角の内よある國れまども余程北の方小
よまで其都ペイトルスボルフなども赤道より北
の方六十度の所ニ當る位の場所柄ゆ一なり其外
歐羅巴の諸國も日本小較ま多少一北の方小ある
ゆ一矢張日本よまも少一寒一平和の方角と外ま
てはまよま北極と南極と小至るまで二十三度半
づとの所と寒氣の方角といひ草木禽獸少く人も

住はまぬ程寒き地なま右の如く赤道より南北二
十三度半ゆ一此間ハ時候熱く夫よま又南北四十
三度づとの間も時候程克夫より又南北二十三度
半づ、北極と南極とニ至るまでの間ハ時候寒一
外國へ旅行するやき衣類と用意をふるもあらず
し時候の様子と心得がまは甚た不都合なり又世
間のくく動ままが外國へ行ま一人ニ彼國の時候
ハ如何哉なまどく尋る者多ままま右ニ迷るる理
合と知らば言葉を費さまて自分ニ分るま一尚
又前の繪圖ニ別合せ見るべ一

印度海飛脚船の立寄場所
 日本より印度海と渡りて西洋諸國へ行く小佛蘭西
 のマルセイユまで道程九千七百里余英吉利の
 サウスマンプトンまで同トく五千四百里余途中
 船と乗替又ハ石炭を積込た立寄場所の模様左
 の如ク先横濱より上海まで五百里五日路なり
 上海ハ支那の南京と距るはと七十里餘揚子江と
 のふ大河の口にある港ふて人の數二十萬人西洋
 諸國の高賣船并ニ支那の小船も出入一繁華なる
 場所なり其土地の産物を絹布象牙の細工物等又

市中の外ニ茶園ありて夥しく茶を製して外國へ
 賣出を○市中ニ城構あり建安城といふ支那人
 を専ら此の構の内小住居一外國人の家ハ構此外
 小あり此城ハ古代三國のとき呉の孫權が繩張せ
 一城として名高き古跡如き也近來支那の政事
 不行届ふて英吉利佛蘭西へ警衛を頼み城中ハ
 外國の旗印と建り○氣候大抵日本と同トみと
 なまども濕地にて水ありて飲水に困るコレヲを
 と傳染病の流行を多し死人多し由なり
 上海と出帆して香港まで四百里船路四日小て着

香港ハ支那の南東の方小島を長五里巾三里岩山のミよて草木少く平地なり。もと支那の領地なり。天保十三年英吉利との合戦、支那人敗背して和睦のとき、島の英吉利一與つてより永代英吉利の領分となまり。其後追々英吉利人の家と建交易場と開き、近來も尚又寺と建立し、學問所を設け、人の數も次第に増して繁昌の港となまり。此合戦の發端ハ英吉利の商人兼て阿片烟草と支那小賣込支那の人も頗ふこの烟草と好こ

追々小其賣買大造となり。一弊阿片烟草ハ人の毒にも似り、此を用途を無益小金と費して國に不為になるゆへ支那の役人の賣買と差留んとをさども英吉利の商人も此を聞入さず内々品物と持渡り支那の人もこの毒烟草のむめとの癖ふありて矢張これを買ひ内證ふて互に商賣し居たりと役人の内ニ林則徐などいへる人ありて大ニ此を立腹し英吉利人の持渡り阿片烟草と理不盡に取押して此を燒棄し阿片烟の政府もて立腹し事の理非を談判もきざし我國

人の荷物と燒棄一とは相濟ざるものなりやて本
國より軍勢と支那へ差向散くぬ撃をく免て遂に
支那より和睦と願ふといふことふれり廣東厦門
福州寧波上海の港五ヶ所を開き償金ハ左の通
約束あり

一六百萬ドルラル

是ハ支那の役人の燒棄たる阿片烟草代金の
の高

一三百万ドルラル

是ハ廣東の商人より兼て英吉利人へ商賣

の事ニ付列員となり一分を支那の政府より
償ふ高

一千二百萬ドルラル

是ハ例のたび英吉利より軍勢と差向を
ニ付其入用として支那の政府より拂と
むる高

右合て二千一百万ドルラルの高と三ヶ年賦ふ

定めも一其拂方延引するとは一ヶ年五分の
利息を取るべしや約定せり

斯く五ヶ所の港を開き二千一百万ドルラルの償

金と拂ひ一外ニ香港の地を永代英吉利の領分小
をべーとの掛合にて和睦の談判始て調ひたり頃
ハ西洋の千八百四十二年支那道光二十二年日
本の天保十三年小當り今より二十六年前のこと
なり其後萬延元年申年天津といふ所にて英吉利の
軍艦と間違のこゝと出来遂に又合戦となり支那の
人敗北一八百萬金の償金と英吉利の方へ拂ひ廣
東の地方小あり九龍といへる地面と英吉利の領
分となり一り○香港の時候はあつて寒中よても
日本の三四月頃の如くはまよる次第小南の方へ

向ひ印度海小出紅海入るまでハ始終熱氣の方
角と渡海するゆ一衣類其外夏の支度と冬履一但
一印度海の暑さにて日本の暑中よりとも嚴きらと
ハふなまきども夜昼ともに同一暑さあて日本ニ居
るとききの如く朝夕夜中の冷氣は休息をふことの
出来ざるゆ一ハ格別難渋なり
香港よりマシシガポウルまで七百里七日路なり但
佛蘭西の飛脚船を走らせ此間小交趾のサイゴン
といふ港小寄り石炭など積込むこの地ハ元安南
の領分なり一ハ六十七年前佛蘭西は攻取らま當時

多佛蘭西のきのとより軍艦商船も出入し追々繁
 昌し赴々土地の産物より米多し
 シンガポウルを英吉利領の島なり赤道を南北の
 方二度の所ふありて時候甚だあつし四季の差別
 ぬくいつも夏の通るして日本の寒中もともぬの
 地より胡瓜茄子西瓜の類澤山あり又此邊の嶋に
 ありハ丁子胡椒生姜椰子芭蕉パイナプルなどい
 る菓實ありパイナプルも草の實あり形は松子に
 似て大なり味甚だよー芭蕉も日本より多實と見
 ぎまどもぬの邊に芭蕉より夥しく實を結て水菓

子不用ゆ味殊に甘く日本の甜瓜に似たりぬの外
 蜜柑橙實等何品ふより交澤山よりして價もやそし
 ○此嶋より虎多く折く人と害をとなり其外禽獸
 には野猪山猫大蛇鸚鵡猿の種類多し飛脚船入津
 るとき土地の人猿鸚鵡など賣物を持ち来り可愛
 らしく見送ども日本へ持歸きバ時候寒して生育
 難し○シンガポウルの人此數凡六萬人此内半分
 ハ支那の人よりて本國より渡世ぬ出てもおなじ此
 外印度海并ニ太平洋の島々サンフランシスコあ
 どにも支那の人の住居を居者多し然る所其者共

外國人へ交る小支那の言葉ハ不通用なる由一英
吉利の言葉を用也世間の様子と知ざる人が支那
の文字ハ廣く通用するよふと思ふ者もあはれども
心得違れり凡世界中ニ交易の行とる、港は英吉
利の言葉の通用せざる所なり又西洋の内地ハ入
てを佛蘭西の言葉と貴びる國なり一四一、當時外
國人は交り外國の模様と知らんよ、是非とも英
佛の言葉と學ぶるべからず
シシガポウルと出帆してマラッカの瀬戸ハ入右
マレヤの地方を見左ハスモサラの島を詠て次第

北西に向ハ印度海ハ出セイロンとて一、島の
内はありポイントデゴウルなる港ハ着をシシガ
ポウルよりセイロンまで海上七百五十里八日路
なり但一英吉利の飛脚船ハ途を途中よりピナン
やハ小島に寄て石炭と積む
ピナンはマカカノ瀬戸の中より右手にあり此島
ハ英吉利の領分なり土地産物の模様を略シシガ
ポウルハ同ト
セイロンは往古葡萄牙の領分なり一、一度荷蘭
ハ取らま其後又英吉利の領分と成り其島の周圍

三百里斗港數ヶ所あり飛脚船の入津する港とボ
 イントデゴウルやいふ時候ハ略シンガボウルと
 同様と暑一産物も同し椰子密柑胡椒の類多
 一殊小桂枝はあの嶋第一番の名産にて諸國へ積
 出をゆへ一名桂枝島ともいふ山にハ象多一或
 ハこれを馴して牛馬の如くつうふ者あり就この
 象牙も澤山な里色く小細工したる賣物あり○セ
 イロシハ暖地より一年二度の米作あり即ち七
 月より十月までの間ニ殖作あり米を翌年の正月
 より三月までの間ニ取收り三月より五月までハ

間小種と下したるものと八月より十月までハ間
 る登るさまども其米を外國へ積出矣程澤山より
 出来を却て他國の米を用ふとあり○セイロン
 嶋は釋迦如来誕生の地より島のく皆佛法ニ歸依
 せり寫の中ハアダムが峰とて高き山あり高さ千
 二百間余島人の物語ニ釋迦如来の山小籠て法
 を説き遂ニ其頂より天上ニ登り今に至る處で其
 足跡ありといふ
 セイロンよりアデンまで九千里船路九日にて達
 す

アデンも英吉利の領分なり紅海の入口あり時
 候はシシガポウルセイロン此よりありあり土
 地柄より一から草木少一人の數一萬人余商賣
 繁昌せむ唯飛脚船ふとへ石炭を積込用意とな
 其のこす遠どもこの邊を渡海す船をセイロン
 を出帆してより外に立寄るべき港なきやへ何處
 をもくも碇泊をばるそのなり
 アデンを出帆して紅海入右の方にはアラビヤ
 の地方あり左の方より寄進を亞非利加州を見
 ち亞細亞洲と亞非利加州との界を一望しこの海

ハシシガポウルセイロンなごより北の方あり
 る割合めてやると冷しきとづぬまども亞非利加州
 并にアラビヤの地方も幾百里となく廣く砂原あ
 りて炎天日照され其焼砂より熱き風を吹送る由
 へ昼夜とも暑氣も堪難し日本より歐羅巴一行
 途中一番苦しき場所なり
 アデンよりスエスマで六百里余海上六日ほど着

スエスマエジプトの南岸の港なり此邊の地方ハ
 ほと土耳其の領分なりいざどもエジプトの城下

カイロといふ所ハシヤとて城代の如き者あり
て自由なこの邊と支配—今もハ土耳其と別の
國のよふ如きなり○スエスの港を遠淺よて本船
ハ沖ニ錨と卸—小船よて上陸を○スエスよりア
レキナンデリヤまで地續百二十里斗蒸氣車よて
一日ニ通越—カイロといふ城下ハ其途中ニあ
り古き土地ふて名所旧跡多—マホムト宗の寺
ハ洪大なる構あり又カイロより三里斗の處ニピ
ラミドとて目を驚をほど大なる石塔二あり高さ
四十文中六十丈石垣のよふ築立をふものなり

此の石塔ハ九四千年前セオプスとい—國王の
墓印といふ世界中ニ名高き旧跡ふて秦の始皇が
築—萬里の長城おも劣らぬほどの大仕事なり○
此の邊ハ四季ともに雨多ふゆを熱國と
ども夜露多し且ナイルといへる大河ありて其潤
ふと草木よく生長を土地の産物ハ綿コッヒーの類
なり○人氣ハ甚だよろ—うら矣旅人通行のとき
用心すべ—

アレキサンデリヤハエジプトの北岸ある港
て地中海を臨見し此海ハ亞細亞州と歐羅巴州と

亞非利加州と三國の間ありあり地中海と名け
たるなり○アレキサンデリヤも實ハ土耳其の領
分ふれども今ハエジプトの支配ふ好りてカイロ
の別城下なりぬの港より佛蘭西の飛脚船小乗込
バイタリイとシ、リとの間ハ狹き瀬戸を通り其
瀬戸口はあまメシナといへる港小立寄て一時斗
船掛一直小出帆して佛蘭西のマルセイルへ赴く
アレキサンデリヤよりマルセイルまで海上七百
里七日路なり
マルセイルを佛蘭西領の南手ありり地中海諸港

の内一番大なる場所ありて諸國の商賣船日々出入
大船千二百艘も船掛をべきほど廣き港あり諸
方へ飛脚船も往来し交易の繁昌をみと一はた
ぬらぬ産物も石鹼香具其外製藥類煙草甘き酒履
帽子等○土地の人數三十萬人余時候ハ大抵日本
小同ト○飛脚船の旅客上陸をせざる先宿屋へ一宿
をこれより佛蘭西の都パリスまで路程凡二百里
余蒸氣車まで一昼夜二達を履し途中ありオレと
いふ繁華なる所あり土地の人専ら絹布羅紗の類
を織る世界ニ名高き織物の場所あり日本より佛

蘭西へ積出を絹糸も多分ありオニへ行々様子あり
 又アレキサンデリヤより英吉利の飛脚船二乗
 是バ佛蘭西の飛脚船とハ乗筋違ひ先同處と出帆
 マルタ嶋ハ立寄ジブラルタルの瀬戸と出て英
 吉利のサウスマンプトレへ着るものとあり
 道程ハアレキサンデリヤよりジブラルタルまで八百
 五十里同處よりサウスマンプトンまで五百五十
 里合て千四百里十二三日の渡海なり
 マルタ嶋ハ地中海の中程ニある小嶋あり元佛蘭

西の支配なり一六七十年前より英吉利の領分
 となり土地柄ハよりより岩山斗形造とも地
 中海要害の場所なるゆへ英吉利より大造ニ臺場
 を築き用心堅固當時マルタの臺場として世界中
 有名高き程なり○此の邊の産物ハ珊瑚珠海綿
 の類多しニシテ并ニマルタ嶋へ着るを珊瑚の
 玉と珠數のよふにつなぎ又ハ花形れとハ刺き糸
 を賣物ニ持来り價ハやを々造とも品物を下品を
 り但一上品ハ英吉利佛蘭西の商人等兼て敷金と
 して其本國へ引上るゆへこの邊に賣買ふは如く

様子なり

ジブラルタルも英吉利の領分なり地中海の入口
ふて臺場の堅固なるを世界中第一番ともいふべ
き構れり海岸の岩山を切て砲門を開き大砲干挺
余も据付あり英吉利人の地中海ふて威光を耀
と占む此臺場とマルタ島の臺場ともて要害の地
と占むふ由てのめとふて諸國の人々を恐
ぶるものなり○ジブラルタルの瀬戸の南岸ハ亞
非利加の地方より北岸と即ち右の臺場あり兩方
の間狭き所ふて六七里斗なり此瀬戸は不思議な

るめと多潮の流なり地中海ハ此瀬戸の一方口
よて袋の如くなる瀬戸の外より始終潮の流込
て内より外へ流出を急ことなりされども古來地
中海ハ水の溢一ことも聞き西洋人の説は斯く毎
日毎夜流込水を地中海の暖氣よて湯氣の如くな
るまで空中ニ消失且地の底も道ありて人の目ニ見
ざる所より外へ流出するをいふべし右の次第より
地中海は何處の海岸よりても満潮も干潮も大抵
同一水の高さよて土地の人潮時といふめとと知
らぬ

サウスアンプトンに英吉利の都ロンドンの西南
 の方三十里斗の所よある名高き港なり諸國の船
 出入りて交易商賣に盛れるハ勿論殊ハ此港ハ世
 界中ハ往来する飛脚船と仕出ハ又外國より飛脚
 船の入津するハ此港なるゆハ貴賤貧富の旅人一
 年の間ハ出入する事幾萬人なる事知ら矣土地
 の繁昌いふ斗もナリ○此港ハ船の修履場數所
 あり洪大なる構あり見物もナリ其外學門所も盛
 なり世ハ名高き蒸氣機關と工夫したるワトとい
 へる大先生も當地にて生息する人なり○サウス

アンプトンよりロンドンへハ蒸氣車より一時の
 間ハ通行もベリ
 右の手續ハ佛蘭西の飛脚船に乗る佛蘭西の
 都パリスへ着ハ英吉利の飛脚船に乗るハ英吉利
 の都ロンドンへ着るハ既ハパリスロンドンへ
 着るハ兩都の間百二三十里蒸氣車と蒸氣船と
 乘りて僅ハ一日路なり先ハパリスよりロンドンへ行
 くハ佛蘭西領の北あるカレイといふ所へ出夫
 より十里余の瀬戸を渡り英吉利領のドラウルと
 いふ港へ着ハ直ニロンドンへ達するハ其外歐羅巴

の諸國より蒸氣車此路縦横五り旅行するとして
 杖笠草鞋の用意小も及ぶ其儘車に乗て百里や二
 百里の道を一夜の間にも行るべきありて遠く
 歐羅巴州の内にて遠國へ旅行すべしといふとも
 實に江戸より近在中で歩行するほどの苦勞もな
 一〇歐羅巴へ着の上宿屋の模様ハ上中下色々小
 めり上の旅籠ふれを一日の賄一人ニ付二三兩下
 の旅籠なまば一日ふ一步斗ふなきあり又火勢小
 て長逗留とをるよい貸坐敷を借と手賄ふするも
 一先宿屋より着を去る店に帳場へ行て名前と記

一部屋の鍵と請取其部屋へ案内させて荷物此と
 も部屋へ入る一先落附る其後出入の節ハなら
 る部屋に戸小錠とありそ一火勢人の出入す所
 宿屋小を盗賊も多し油断矢べうらば宿屋の部屋
 百一と番附あり大きな宿屋の部屋の数五
 六百もあり部屋に居て宿の者へ用事あるときは
 部屋より勝手へ通を針金の糸代引き鈴を鳴ら
 して人を呼ぶ庵一食事を部屋より取寄てもう又
 食事の間ニ出て火勢と一處にてさう一但
 食事を部屋小引けば旅籠の代少一増をべ一〇外

ふ出るよ馬車といふものあり英吉利の言葉よ
カリエイジといふ二人乗四人乗の車を馬に引ら
せ日本ふきを駕籠の代ふれども此ふれども駕籠
よまも乗りよくしてまや矢張江戸の駕籠屋と
同トことふて車屋へいひ付て雇ふこともあり辻
駕籠の様途中にて乗らぬともあり馬車の賃錢
ハ道の遠近よて取極又ハ一時何程と取極らぬと
もあり大抵一日借切よて乗るを一人前の車賃三
四兩なるべし又オミ子ブスとて乗合の馬車あり
ぬの車いたとへが筋違見附よて日本橋までとら

日本橋より京橋までとら道筋を極て一日ふ幾度
も同ト道と往來するも此よて人数二三十人も乗
るなほ大車なると乗合の人を日本橋より乗て京橋
まで行く者もあり又ハ銘々行く先の方角よ由て
途中より乗り途中よて下る者もあり但し賃錢を
其道筋を半分乗らば皆乗らば同一ぬとせられども
一軒ふ此車の賃錢ハ甚だやが市中人通の多き
通筋にハぬの車幾挺も往來する四一市中的道筋
をよく心得て此通よて彼通へと順々ふ飛乗とを
まを僅斗の賃錢よて終日車よ乗らば一

右の外西洋諸國の風俗模様を事明細小説んよ
其事柄多くしてその小冊子に盡を盡すふあらざ
るはこれと略して下の巻も又太平洋海の飛脚船
て西洋へ行く途中の模様とあらす一記をべ一但
一西洋諸國の政事向年貢取立方其外文學兵制
等のめとる去年余が著したる西洋事情といへる
書小其大略と記せり就て見ゆべ

西洋旅案内卷の上終

福

4-1

著作